

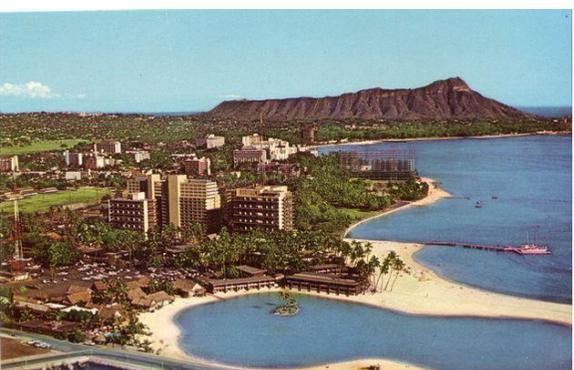
ビッグサプライズ

喜多川雅人

空港から一步出ると、ココナツの甘い香りの潮風が琢磨を迎えてくれた。

ハワイだ。待ち受けたガイド役の女性の大きな笑顔が、琢磨を四十年前に引き戻してくれた。リンに会える。

日本人に海外旅行の自由が与えられたのは、一九六四年だから、四十二年前である。航空会社で営業企画を担当する山中琢磨は、唯一の国際線運航会社だったJ社を広くPRするため、外国航空会社の社員を格安料金で日本に招くツアーを企画していた。英語が達者だから、ガイド役もこなす。



最初のツアーだったろうか、羽田国際空港を後にして、チャーターしたバスに揺られながら行程をマイクで説明する琢磨に、一人の女性の目が絡まった。栗毛の髪と青い目、そして右頬の小さなえくぼが魅力のカナダ航空スチュワードレス、リンである

招待した二十人が山王のホテルにチェックインすると、コンダクターのアメリカ人男性から、「部屋でアイスブレイクするけど、よければ付き合わないか？」と声がかかった。リンがそれとなく琢磨を誘う。小一時間のパーティーは終わったが、となりに座ったリンの指が琢磨のそれに絡んで離さないまま彼女の部屋に…。

相性がよかったのだろう、帰国後も便りを交わし、一年後には、休暇を合わせてワイキキで再会した。宿は、オープンして間もないIホテルである。オーナーはアラン・宋という地元の財閥。リン曰く、「カナダ航空の凄いVIPなの。中国人にしては背が高く、なんとなく体つきや雰囲気は琢磨にそっくり…」。

それから二年後、リンから久し振りの手紙を受け取った。なんと宋氏に迫られて近く結婚することになり、スチュワードレスを辞めてハワイに来ているが、

今一度だけ会いたいという。琢磨は宋がバンクーバーに出張するタイミングで休暇をとって訪島した。

Iホテルでという琢磨の願いがかなって、思い出の二〇〇六号室で激しい一時を過ごす。すべてが終わり、その頃カリフォルニアで誕生した高価な赤ワインで疲れを癒すと、リンは、「来週末に式を挙げるの：」と行って、廊下に誰もいないのを確かめてから、最上階のスイートルームに戻っていった。

部屋を出る女に男が囁いた。

「二人が忘れないで二〇〇六年にこの二〇〇六号室で再会できたらいいね！」

異動・転勤であつという間に時は過ぎ去り、J社を退いてから、琢磨は日本人のロングステイを啓蒙する団体を手伝っている。二〇〇六年に入って、ハワイ観光局がプレスツアーを企画、琢磨に記者団を引き連れて参加してほしいという。訪問先はハワイ島とオアフ島で、ロングステイヤーが飽きずに滞在を楽しめそうなスポットが顔を並べている。

出発の前にメールを整理していると、外国人名のメールに目が留まった。

発信人はリン・宋。まさか……、絶句しながら開けると、

『琢磨、どうしている？ リンです。偶然にもあなたの名前を私の熱帯植物園を訪問する日本記者団のリストに見つけたの。ハワイ観光局からメールアドレスを聞きました。神様のお恵みよ。二〇〇六を憶えているかしら？ 再会できるかも……。リン』

梅雨空が鬱陶しい成田を後にして、六時間半でビッグ・アイランドに……。駆け足旅行だから忙しい。コナでの取材を終え、三日目にはハワイ観光局のバスでヒロに向かう。お尻が痛くなり、バスツアーに辟易する頃、熱帯植物園に到着。

オーナー夫妻が現われた。足が弱っている宋さんの車椅子をリンが押している。宋さんは八十歳ぐらいだろうか。リンとの四十年ぶりの再会である。体型はさほど変わっていないが、真っ白な髪が時の流れを語っていた。

カフェテリアで、通訳を介して記者団と歓談する宋さんを置いて、リンがそれとなく琢磨に近寄り、少し外れた木陰で、元恋人たちはしばしの会話を楽し

んだ。宋さんにはスチュワード時代の仕事で巡りあったJ社の元幹部と紹介してあるという。

リン「そろそろ時間ね。私はホノルルには行けないけど、長男がIホテルの支配人をしているの。二〇〇六号室を予約してあるわ。ご招待にしてあります。ちよつとしたサプライズも……」

ハグするお互いの指先にこもった力が全てを物語っていた。

最後の夜は、リンが手配してくれたIホテルで過ごした。二〇〇六号室に入つて間もなく、ノックがあつてドアを開けると長身のホテルマンが立っていた。

「ホテルの総支配人をしているダニエル・宋です。私どもをご利用頂き有難うございます。これは母からのささやかな贈り物です。ではごゆっくりとお寛ぎください」

贈り物はオーパス・ワン。リンからの小さな封筒を開くと、見覚えがある柔らかな手書きでサプライズが姿を現わした

『支配人をしている長男がご挨拶に伺います。彼はあなたの子です。宋も真実は知りません。あなたも知らないことにしてください。約束ね。オーパス・ワンで四十年前を思い出して……。何があるか分からない人生だけど、もう二度とあうチャンスがないかもしれないわね。でも私はハッピーです。リン』。

それから十二年が過ぎた二〇一八年のクリスマスイブ。日本人男性の平均寿命をこえて、その日に八十二歳の誕生日を迎えた琢磨は、集まった三人の孫たちを送り出すと、九時過ぎには床についた。祝い酒が効いた深い眠りが浅くなつた頃だろうか、リンが夢に現われた。誕生日にビッグサプライズを贈つたという。

年が明けた朝、庭に出て思いっきり新年の空気を吸い込み、ぐるりと見回すと、駐車場脇の椿に絡むように白い花が三つ覗いているではないか。椿は例年赤い花を咲かす。遅れて庭に出てきた連れ合いが叫んだ。「あら、これサザンカよ、どうしたのかしら……」。「どっかから風で飛んできたのが育つて花を咲かせたのだろう。初めて見たね。年明け一番のビッグサプライズだ……」

……愛しても 愛しても ああ、人の妻……、カラオケで得意とする演歌が眩くように口からこぼれた。(完)

註・写真は一九六〇年代のワイキキ風景